



一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。

先人の言葉に学ぶ 2

戦争とは……

前号（第23号）の「先人の言葉に学ぶ」には「大変わかりやすく、平和の大切さ、戦争の愚かさを説かれていて、感心しました」といった感想が多く寄せられました。

人類は「戦争の愚かさ」が身に染みているにもかかわらず、戦争が止むことはありません。「3400年前から今日まで、世界で戦争がなく平和だった期間はわずか268年*」という資料もあります。人類史が戦争の歴史であったのは厳然たる事実です。この面を直視しなければ、平和を創出することはできません。

今号では、人類にとってそもそも戦争とは何か、何故戦争が起きるのか、戦争は人間をどのように変えるかに焦点を絞って、「先人の言葉」を集めてみました。

自然状態は、むしろ戦争状態である

18世紀のドイツの哲学者イマヌエル・カントは『永遠平和のために』の中でこう述べています。「一緒に生活する人間の間の平和状態は、なんら自然状態ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。言いかえれば、たとえ敵対行為が常に生じている状態ではないにしても、敵対行為によって絶えず脅かされている状態である。それゆえ、平和状態は創設されなければならない」。



イマヌエル・カント

今から2500年前の、中国・春秋時代の兵法書『孫子』には「兵は国の大事にして、死生の地、存亡の道なり。察せざるべからず（戦争は国家の大事であって、国民の生死、国家の存亡がかかっている。よく考えねばならない）」とあります。

『孫子』には、「百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」、「彼を知り己を知れば百戦して危うからず」という言葉もあります。

目先の戦闘の勝敗のみにとらわれず、国家運営との関係から戦争を論じ、政略・戦略、そして人間心理を重視するのが『孫子』の特徴です。そのため、2500年後の核拡散の現代においても古びることがなく、中国、アメリカはじめ多くの国の

軍関係者にとどまらず、ビジネスマンにも読まれています。

中国共産党が2003年に改定した人民解放軍（中国軍）の法規「人民解放軍政治工作条例」には「世論戦、心理戦及び法律戦を展開し、敵軍の瓦解工作を展開」と明記されています。「世論戦」は国内外の世論に訴える活動、「心理戦」は相手の心を揺さぶる活動、「法律戦」は行動の正当性を主張するための法的根拠を整える活動で、この3つを「三戦」（さんせん）と呼びます。中国の政治・外交をも貫くこの「三戦」も『孫子』に深く学んだ活動といえます。



鳥取県湯梨浜町燕趙園の孫氏像

『戦争論』を著したクラウゼヴィッツは、「戦争とは他の手段を以てする政治の延長である」と言っています。

毛沢東もこう言っています。「政治は血を流さない戦争であり、戦争は血を流す政治といえる」。

武器もまた神聖

戦争は、いかに正当化されてきたのでしょうか。

1世紀のローマの歴史家タキトゥスは、「戦争は悲惨な平和よりいい」と言っています。

「戦争に備えることは、平和を守る有効な手段のひとつである」。アメリカの初代大統領ジョージ・ワシントンの言葉です。

15〜16世紀のイタリアの政治思想家で『君主論』『戦術論』を著したニッコロ・マキャベリは、「やむを得ざるべき戦いは正しく、武器のほかに希望を絶たれるときは、武器もまた神聖である」と言っています。

「武器を使用するのを厭（いと）う者は、それを厭わぬ者によって必ず制服される」。これは、先に引用したクラウゼヴィッツの言葉です。

イギリスの元首相ウィンストン・チャーチルは「面白いから軍備を続ける者はいない。恐ろしいから軍備を続けるのだ」と言っています。

あのアドルフ・ヒトラーは「自己をあらゆる武器で守ろうとしない制度は、事実上自己を放棄している」と言っています。

一方、「戦争は戦争を養う」と喝破したのは、愛児の頭上のリングゴを射た弓の名人『ウィルヘルム・テル』などの歴史劇で知られる、18世紀のドイツの劇作家フリードリヒ・フォン・シラーです。

また、18世紀のアメリカの科学者で、独立宣言起草した政治家でもあったベンジャミン・フランクリンの言葉は見事です。「良い戦争、悪い平和などあったためしがない」。

ウィンストン・チャーチル

は、著書『世界の危機』で、「人類ははじめて自分たちを絶滅させることのできる道具を手に入れた」と第1次世界大戦を総括しました。しかし、第2次世界大戦時の指導者という立場では、次のように語らざるを得ませんでした。「私には、血と

苦しみと涙と汗しか提供できるものがない。我々は全力で戦い、あらゆる犠牲を払っても勝利するのだ。なぜなら、勝利なくして生存はあり得ないから」（1940年の首相就任演説より）。

さらに、こうも言っています。



ポスター「PEACE」

作：寺戸良信

「一度剣を抜いた以上は、息が絶えるまで、勝利を完全に手中に収めるまでは剣を棄ててはならぬ」。「どんな戦争といえども容易なものはない。一度戦争に身をゆだねた政治家は制御しがたい戦いの奴隷となる」。

戦争は人間を変えます。そして、ここまで行きつきます。

「死んでも祖国のためにならぬ。敵を倒すことが祖国のためになる」。

「諸君が指揮官になった時、部下に死を与えることを躊躇してはならない。死とは、ただ人間がこの世に入ってきたドアから、また出ていくだけだ」。第2次世界大戦のアメリカ戦車軍団の指揮官として知られるジョージ・パットンの言葉です。

米国を相対化する

20世紀はアメリカが台頭し、やがて覇権を確立した時代で、戦争と革命、大量殺戮の世紀でした。寺島実郎氏の『二十世紀と格闘した先人たち』より引用して結びとします。

「十九世紀のアメリカは『海外の紛争に関与しない』という『モンロー主義』を背景に、対外戦争を三回しかしなかった。この三回の戦争での死者は四千人、四百人足らずであった。ところが、二十世紀のアメリカは、第

一次世界大戦に参戦して以来、戦争まみれの世紀を主導し、四十三万人もの戦死者の墓標を積み上げた」。

「百年前、二十世紀初頭の状況を振り返ってみると、日本の戦後がいかに米国の影響を受けてきたのが鮮明になる。あまりにもアメリカとの関係が重かったために『トラウマ』としてのアメリカを脱却できないまま、二十一世紀初頭の九・一一シンдрロームに巻き込まれていったのである。真の『戦後レジーム』からの脱却とは、米国を相対化することであり、米国の世界戦略に一体化していく国際関係しか構想できない状況では日本の二十一世紀の地平は拓かれないであろう」。

*『本当の戦争―すべての人が戦争について知っておくべき437の事』（著 クリス・ヘッジズ）2002年ピューリッツァー賞受賞、ニューヨーク・タイムズ戦場特派員）Wikipediaより孫引

（交易場修）

〈後記〉

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。

ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。